



## 随 想

### 元の小壺

村岡 景夫

二十年振りに京都に移り住むことになった私に友人の陶工Aさんが、今度は台所道具一切自分の窯で引受けますからという有難い厚意に接して感激した。三十年前新婚の時には河井寛次郎さんから飯茶碗や片口まで一しきりいただいた身分不相応な新家庭を始め、来訪者の一人から身の程をしらぬふるまいとおしかりを受けたことを思い出す。

その後戦災や類焼でその思い出の品々はほとんどどうしなってしまった。もともと食べもの道具類には親ゆずりの好みがあったのだけれど、やたらにものを蒐めて私蔵する興味

もなく、また執着もない。蒐集家からは熱がたりないのだといわれるけれど、それは一向苦にはならない。けれど身辺には自分の心を温めてくれる器をおいて、日々好日をたのしみたい気持はどこへ行ってもなくならない。

香里の家の修理ができてやっと任せそうになったので、ねだりごとをしようと七月の初めに五条坂のAさんの仕事場を訪ねた。手狭な玄關の片脇のたなに様々な焼物がところせまくつまかさねられていた。そのたなの間に一つの小壺があるのに気がついた。失礼ながら塵が一ぱいかかっていたが、手で拭いてみると白釉の薄くかかった上に二カ所程餡釉のほけがけがしてある。形は腰低く、口の比較的大きな壺である。裏をみると重ね焼をしたのだろう荒いろくろのあとに小砂がのこっている。すわりのいい力強いたくましい小壺である。丁度Aさんが不在だったので令息にだけあって辞し、もう一人の友人を訪ねた。帰りにもう一度よつてみると幸いAさんが帰っていられて、ご自慢の珍品李朝の茶碗でお茶を御馳走になりながらねだりごともし一応に済んだのだが、あのたなの上の小壺がどうも気がかりで仕方がない。あきらめ切れないので厚顔

ましくも勇を鼓して所望を申し立ててみた。ところがそれはAさんの愛蔵品で御自慢のもの一つだった。「これは元のものだと思えます」とのこと。今更引こみがかず、気が弱くなりかけていたところ「お気に召したら持つて帰って下さい」とのAさんの言葉、ほつと救われた気がしてお礼もそこそこ、早々に元の小壺をかかえて一番下の娘と二人暮らしの香里の家に帰ってしまった。

床の間において線香立にしようとして毎日眺めていたが、かかっている棟方志功の「百花燦爛」という多彩なかけものが負けている。そのうち娘が茶をはじめたので、今はこぼしにして毎日身辺で愛玩している。あとできけばAさんがこれを手に入れたとき河井さんにも讃嘆されたものだそうである。

京都に帰ってから久しく断っていた道具屋をのぞくことが始まりかけているけれど、これ程惚れ込んだものには未だ出くわさない。無鉄砲に喰いつくことは柳先生から教えられたたまものかと思う。迷惑をされたのは、さんだらうけれど、愛蔵の珍品を所望されたことをよるこんでいてもらえることと考えて独り悦に入っている。

(香里高校々長)

## 女性と改名

荒木 良造

「トラ」という名前の女性が、家庭裁判所へ「トラ」という名は、どうも気がむきませんから、「有起子」と改名していただきたいと申し立てた。その理由として「トラ」は猛獣の虎に通じ、はなはだしく非民主的であり、私達女性の名としては、極めて不適当であるばかりか、本人に侮辱の感を与える。例えば悪婆を「オトラバアサン」とよぶなどがそれであるというのである。ところがこの申し立ては許可されず却下された。そこでこんどは東京高裁に抗告した。ところがこゝでも却下された。却下の理由にいわく『「トラ」という名から繊細優美な女性的感覺は生じないが、非民主的であるとは解しがたい。また申立者がいうように悪婆を俗に「オトラバアサン」とよぶことはあつても、「トラ」その者に侮辱罵詈の意味はない。従つて許可できぬ』というのである。

話しかわつてこんどは「クマ」であるが、うら若い女性にふさわしくないし、祖母の名も同じ「クマ」だから、通信の場合にも、来訪者のあつた時でも、混乱して困る。それで「花子」と改名してほしいと申し立てたら「それはもつともだ」というのであつさり許可を与えた家裁がある。これは前述の「トラ」の場合と比較して、「クマ」の許可は適當であろうか。この「トラ」と「クマ」の許可、不許可の問題は、疑問符のまま残つて行くであらう。ただし「トラ」は十二支にあるが「クマ」は十二支にないという肩書をつけたまま。

改名の正当な理由は、一、襲名、二、同姓同名、三、神官僧侶になる場合、四、難解難読、五、珍奇、六、男女の区別困難、七、帰化、八、その他の八つである。

「ウン」という女性が「きい子」にかえてほしいと、家裁(仙台)へ申し立てた。その理由は「お客さんが来られたとき、「ウン」と咳払いをせられた。私は自分をよばれたと思ひ、ハイと返事をして笑われたことがある」というのである。これは正当な理由にならないから、無論却下された。

許可された例を少し左にあげる。

ウン子——多喜子      メチャ——みつ子  
デコ——秀子      たこ——たくよ  
ケチヨ——武子      マウシ——真子  
ヒル——ひろ子      わくり——利枝子  
「一全」(カズマル)という名前の女性が、かつて徴兵検査の通知をうけとつたことがあるし、後々男とまちがえられて困るというので簡単に「かず子」とかえてもらった(仙台)。そうすると小六(桃子)一馬(弘島)克己(名古屋)秀美(東京)などの女性も、改名を申し立ててはどうだろう。鶴松(京都)捨松(東京)雪松(東京)梅松(大阪)などの女性もそうだし、「吉」のつく為吉(札幌)糸吉(東京)萬吉(東京)や、「雄」のつく英雄(高松)亀雄(群馬)光雄(高知)久雄(福井)などの女性も、改名に近寄つてきたし、仮名書きのトラキチ(東京)タケマツ(東京)ハルキヨ(鹿児島)マサヒデ(福井)などの女性も改名しかるべしと思われるが如何。ただし宣伝価値からみると改名しない方がよいかもしれぬ。

女の子に男の名を、男の子に女の名をつけると、丈夫にそだつという俗説がある。健康第一を悟つた親達が、虎熊猪鹿馬牛象獅豹などの動物名をさけて、この男女アベコベの名

付けをした結果、小六や一馬、鶴松、為吉などが、生れたのかも知れぬが、女性本人にとっては、極端な男名はつらからう。

戦前の話であるが、奈良県に「沢井」という苗字で、名前は「磨女鬼久寿老八重千代子」(マロメキクジュロウヤエチヨコ)という長い名の女性があった。お父さんは神主で、こんど生れる子供の名を、男の場合はこれ、女の場はこれと、いろいろ考えていた。お母さんもひそかに考えていた。さて生れてみると女の子だ。夫婦の間に名付け争いがはじまり、結局落語の「長名」にでてくる「ジュゲムジュゲム……」のように全部つけねばおさまらぬことになり、この長い名になった。やがて大きくなり、女学校を了え、上の学校へはいるにつれて、この長い名が評判となり、一時関西の新聞をにぎわした。新聞記者は得意する、外出すれば顔を見られる、お友達は尾にひれをつけて宣伝する。こまゆぬかかれたあげく、学校長のはからいで、改名願が異事にとどけられ、最後の千代子に落ちついて、やれやれあんどされたさうである。

最近若い女性が映画女優や、流行歌手の名と、自分の名とを比較して悲観し、名付け親

を恨んだ上、いつそ改名しようと思ひ、弁護士事務所へ相談にくる人があると聞くが、「悲観した」「親を恨む」だけでは正当な改名の理由にならぬ。

(元教授・図書館長、「名乗辞典」の著者)

### ベルン美術館長の想い出

土肥 美夫

一昨年の秋、東京で、二十世紀美術の開拓者の一人であるパウル・クレーの大展覧会が催された。かねてこの画家の詩的な作風に傾倒していた私は、多忙の時間をさいて上京し親しくその作品にふれることができた。その感動は大きかったが、それと前後して、日本のクレー展のためわざわざスイスから来日された美術史家フグラー教授と京都でお会いできたことも忘れ得ない想い出である。教授はクレーの遺作を保管しているベルン美術館の館長であるとともに、ルネッサンス芸術及び現代美術の研究家としても著名な方である。私はその頃翻訳していたクレーの伝記につい

### 寒 牡 丹

水内 菊代

(香里高校図書館員  
「馬酔木」所屬)

三山も雪ましるなり飾焚く  
雪飛ぶや線刻うもる磨崖仏  
雉子あゆむ丁石雪にかくる坂  
弥陀の庭雪にまぎれず霞網  
牡丹咲きふぶきやまざる塔ふたつ  
藁塚に目白たまれり夕吹雪  
餅つくや雪に暮れたる坊の土間

て疑問の点など多くの教示を受けるかたわら二日間にあつて奈良の案内役を勤めた。最初の日は古美術専門の森嶋氏が同道されたが翌日は素人の私一人が案内役だった。教授は日本美術について予備知識はもっていないとのことだったが、様式の相違を見分ける直観力の鋭敏さはさすがで、舌たらずの説明にたいする私の懸念など無頓着に、教授の方から生いきした印象をつぎつぎ話しかけてくれた。実に熱心な觀賞ぶりをみ、愛情をこめて語る言葉をきいているうちに、私は青い眼をした瘦軀長身の教授の姿に困境をこえた美の巡礼者を認め、日本人のような親しみを覚えた。最後に法隆寺の夢殿をみおえると、外はもう薄暗く、人氣のない境内を歩きながら、私は、以前からもっとも強く心惹かれていた救世観音について、教授の印象を尋ねてみた。教授は即座に、あの美しさには内面的精神的な深さがある、もっとも感動した作品だ、と答えられた。マルローは百済観音を世界でもっとも美しい彫刻のひとつだと絶讃しています、が、こい返すと、もちろん美しいがああ美しさは唯美的だ、聖的なものではない、ヨーロッパでいうマニエリスムの美だ、と仏像の

姿を両手で虚空に象<sup>なぞ</sup>るようにして話された。それをきいて私の親しみはさらに深まった。私たちは夕晩に沈みゆく斑鳩の里に名残りを惜しみつつ、京都の日本風な宿へ帰った。二日間の古寺巡礼で教授は心からうちとけているかにみえた。慣れぬ手つきで夕食の箸をとりながら、「日本の文化には古代の原始的な自然感情がそのまま洗鍊されて残っている。例えばこの箸だ、指の延長で一種の有機的なフォルムだ。西洋のフォークやナイフは自然の指とは別の機能、人間が自然を支配するため切つたり突き刺したりする機能をもっている」と、そのほか幾つかの例をあげ、日本文化の現代的な価値を賞揚された。教授は、古今を問わず様式とリアリズムの並存が日本文化の特長だという。しかしそのリアリズムには残念ながらヒューマニズムが欠けています、と私は反論し、最後の晩はリアリズム論議のつきぬままに教授とお別れした。その後数ヶ月してベルンに帰った教授から手紙をいただいた。それには奈良が日本潜在の頂点だった。来年度は西洋芸術と東洋芸術の比較を講義する準備をすすめている、と書かれていた。私は時折青いつぶらな瞳で仏像の前に佇

## 山陰の旅

杉本 峰子

(大学経理課員  
・林間同人)

陽のひかり斑らに輝りて放牧の馬遠く群るる広きくさ原

正月の夜は商店街のしづかにて光と風と屑との乱れ

汽車に過ぎる部落は雪にひそまりて軒につるせる柿のみ赤し

浜村の砂丘に雪の深くして稜線遠く波は荒れるる

やはらかに砂丘に雪は積りをり冷え覚えつつ深く踏みゆく

んでいた教授の姿をなつかしく想いだす。そして、そのとき、チュニシア旅行によって東洋に開眼し己の画風を確立したクレイーのことが、私にはいつも連想されるのである。

（商学部助教、ドイト語）

## 募金術

### 賀集 一

初秋のある日、所用のあったのを幸い、気になっていた記念事業の寄付金を持って母校を訪ねた。京都へは仕事でよくでているが、学校にはなかなかよる機会がつかれない。その日、借金をかえすような若干ハズンダ気持ちで訪ねたものだ。そして本部の有終館の階段を上って受付と書いた窓口で、募金事務局の所在をきいた。ところが驚いたことには、その受付嬢はしばらく考えた末、もう一人の同僚に「致遠館だったか知ら」と聞いて、教えてくれた。これは失礼、と有終館をでてふり返ったら、そこには同志社と同志社大学という二枚の看板しかなかった。その足で致遠館

に行つたものの、アッチでもない、コッチでもないで、部屋につき当るに随分と手間どつた。お隣りの盲人学生友の会か何んかの標識の方が余程目につきやすかつた。

自分の粗忽さもあつたが、腹がたつて事務局の小野さんたちに毒づいて、それでも寄付だけはすまして帰つた。それからだいぶ経つて、校友会の大釜さんが会費を集めにくたきも、この余憤をぶちまけた。

こんなことをいつたらお叱りを受けるだろうが、同志社は本気で募金をやっているのかと疑問に思つたわけだ。三十四年から募金運動を展開していることは知つてゐるし、一昨年の十一月末、校友、同窓、父兄会の代表の懇談会にも出席して、「募金の成否は同志社の将来に大きな影響を及ぼすものである。同志社の隆昌発展を祈念するわれわれはこの事業の完遂に努力する」と決議した一人でもあるが、募金を扱う部屋さえ明らかに示せない今の事務局の在り方、肝心の本部にも、キャンパスのどこにも、募金の現況とか、アツピールした看板一枚立っていないでは、この十億円という大募金も、学内ではさほど関心事になつていないのかと心配になつた。募金は校

外運動で、学問の研究を旨とする大学内には、これに関するPR的なことは一切タブーか。内に盛りあがるものがなくして、いかに外部に訴えてみても、その効果は期待できないのではないか。その後も師走ちかく校庭を歩いたが何もしてなかつた。

大阪のある民間団体の責任者は、かね集めの名人といわれているが、彼が年に一、二回会費と称する寄付金集めに、会社その他を回る際の準備がまたいたしたものだ。その時々内外の時局話はもちろん、目的の会社の経営陣の異動調査、株価の変動から最近の製品その他詳しい資料を頭にたたきこんでから乗りこむ。そのトップクラスと対等に話ができるように話題を用意してゆくから、先方は電話一本で「お待ちしています」ということになる。

最近、新聞社の同僚から、安倍学習院長が五億近い募金にかけずり回つて、これを達成した苦勞話をきいたが、一代の哲学者、教育者である安倍能成氏でも、募金は結局「歩かねばダメだ」と悟つたそうだ。これはセールスマンや保険の外務員、新聞記者、あらゆる商売の道に通ずる言葉だと思つたが、寄付を集

めるコツが、このへんにあるとするなら、これは鍊金術ならぬ募金術、いや体系づけて募金学があつても、可笑しくはないと考へるがどんなものだろうか。

(朝日新聞、大阪厚生文化事業団、社会事業部長)

## 卯年

中嶋 静恵

デパートの美術品売場で何ともかわいいたるの置物を見ていたら、ふと思ひだした。

ああ、そうそう、亡くなった彼は卯年だったつけ。そうすると今年は生きていたら還暦というわけだね。六十の彼の顔ってどんなかな。そう思つてひとりであつてしまつた。笑ひ去つて、こんどは隣りのガラス製品に目を向けたら、これはまたあまりにも美しい若草色の花器が目にしみて、またもや緑の野を走る兎の姿が想像され、思ひは彼に戻つた。

兎だから彼はびよんと南の島まで跳ねて行つたのかな。家族まで引き連れて。ああ、あの頃の南の島は自由だったつけ。神様以外に

頭をたたかれることはなかつたつけ。ところが十年も過ぎたあるとき、星の印の帽子を被つた獵師が現われて一網打尽に兎狩りをしてしまつたから緑の舞台は一時にどんでん返しに暗になつてしまつたつけ。もう、おしまい。檻の中では逃げられないから兎は弾丸にやられてしまつたのだ。赤い血を流して。

ああ、嫌だ。あんな獵師は今ももういないだろうか。私は思はずあたりを見廻した。案外、特売場の人混みの中あたりに星の帽子を裏返しに被つて立っているのではないかな。くわばら、くわばら。

私は外国にいる息子どもへのプレゼントを買いにきたのだが急に嫌になつて下りエスカレーターに飛び乗つた。

一階まで下りながら考えた。息子が外国にいるからって何もわざわざ松の木から富士山やお日様がのぞいているようなものをプレゼントする必要なんかないわ。美しい山は外国にもあるしお日様は世界のものだ。どうせ辰の息子は大空を駆け巡るだろうし、申の息子はどこの国の松にも住めるだろう。

そう思つて心を軽くすると折からきたバスに乗つた。目の前に還暦くらい歳の男の頭がい

くつも見えた。その中にN先生に似た頭があつたので、私はついこの間N先生にいわれたことばを思ひだした。「あなたはいいですね。もう四人のこどもさんがみんな一人前になつて。あなたは御主人が亡くなつてむしろよかつたのじゃないかな」それは私どもの若いときを知っている先生の遠慮のない思いやりと真実とに溢れたことばに外ならなかつた。しかも私はちまっぴりそれを噛みなおしたかつた。お父さんがいない子は神様が特別にひいきしてくださるとでもいうのかしら。不公平だな。でもそうだとすればありがたいことにはちがいない。しかし子どもが一人前に成長したのはやつぱりお父さんの血のせいもあるわ。彼が死んでよかつたつて？ そんなことはないわ。やつぱり生きていた方がいい。あの先生は私が元気な声で歌うのを酉の習性だとは御存知ないのだから。

兎狩り絶対反対！ ねえ、バスの中のみなさん、私のことわかるでしょう。

私は珍らしくまじめな顔になつてバスの中をぐるりと見わたした。(女子大学事務主事)

ご主人、中嶋正義氏はマニラ教会牧師の当時、昭和二十年、現地で応召、戦死される。(編者)